

可能性を引き出す絆

— 特別支援学級の打楽器活動 —

中西 智子*・西村 陽子**・高須 昌子***

はじめに

三重大学教育学部が取り組んだ「現代的教育ニーズ
取り組み支援プログラム（現代 GP）の平成 19 年度・
20 年度」の 1 つに、津市立白塚小学校特別支援学級
「なかよし学級」との取り組みがあった。「なかよし学
級」は A 組：知的障害、B 組：情緒障害の 2 学級で
ある。A 組と B 組の 2 人の担任との打ち合わせによ
り、「なかよし学級」として「音を出す試み」から
「音楽概念」を生み出す活動を展開することになった。
本稿では活動の概要を紹介することで、特別支援教育
における音楽の位置づけを検討したい。

「なかよし学級」における音楽活動のねらいは、ク
ラス内の一人ひとりの生得的な成長の差異が顕著な彼
らの成長過程において、「私と仲間・仲間の中の私」
の関係でそれぞれが自らすすんで達成感を共有できる
こととした。そのために、音楽的な活動を通しての
“学びの場”を用意することであると考えた。人の成長
には、生まれながらに得た能力を成長の過程で引き出
し、“育む道すじ”がある。一方、人にはそれぞれの
“学ぶ道すじ”には個性（差異）があるように、なかよ
し学級の児童が学校で学ぶ道すじには児童一人ひとり
に著しい個性がある。本活動では一人ひとりの児童へ
支援の方法・内容に差異はあるが、基本的にはどの子
も集団教育で相互に学びとり、個々の発達を促す一つ
の方法として、「音楽」活動の実践を位置づけた。

具体的な実践の基軸は、児童が「おと」・「ことば」
・「うごき」による様々な音楽活動を通して、『私』
の思いを「仲間の中の『私』」として、他者の思いと
協調しながら、自分が納得できる活動ができること
である。そこで、指導内容は音を出す活動でありながら、
児童が身体で、気持ちで、納得できる全員での活動展
開を重視した。

* 三重大学教育学部

** 前 津市立白塚小学校

*** 津市立白塚小学校

1. 「仲間の中の『私』の視点」のねらい

音楽は、世界中の人が生涯を通して、各人さまざま
な位置づけで人生に添う存在であろう。白塚小学校の
「なかよし学級（A 組・B 組）」の児童（平成 19 年度
5 人、平成 20 年度 8 人）の活動では、クラスの児童
一人ひとりが音楽活動を楽しめるかどうか、を問うこ
とから始めることであった。次に、児童自身が自らの
「経験」から「知」を生み出す過程は、「経験を通して
知る・判る」ことから出発することへの確認であった。

児童との 2 年間の活動プログラムの視点は、経験
を通して、児童自身が自ら「なかよし学級」の仲間とし
て活動を楽しめる経験を積み重ねることであった。仲
間と一緒に「経験」から体験的に仲間と共有できる
「知」を生み出すことができれば、と念頭に置いた。

指導計画で目指した点は、

- ① 一人ひとりの児童が自分の経験を活かして、充
実感を得ること
- ② クラスの仲間と一緒に楽しみながら活動を展開
すること
- ③ できるようになった手応えを仲間と認め合うこと

そのうえで児童が『私たちの音楽』を生み出す授業
展開の実践を計画することにした。

平成 19 年度は、樽を太鼓に見立てた「樽太鼓」と、
直径 30 センチ厚さ 3 ミリの段ボールの筒を利用した
「段ボールの縮太鼓」を使用して、「ことば（意味の有
る“ことば”と意味の無い“ことば”）」のリズム打ちか
ら始めた。そして、「ことば」「リズム」「音の響き」
の関係に慣れることをめざした。児童はこのような経
験を通して、仲間と音と一緒に出す手応えを経験して
いった。

次に、仲間とリズムが合った瞬間の手応えを感じた
頃、リズムが揃う方向へと指導計画を進めた。打楽器
のリズム打ちを支える拍感覚を児童が確認する方法と
して、児童自身の身体で拍の確認が前提であろうと考
え、平成 20 年度は、打楽器（中太鼓、太鼓類）の指
導と共に、バンブーダンスを加えることにした。

児童は床へ置いた2本の竹を3拍子で跳ぶことから始めた。個々の児童に合ったゆっくりしたテンポを教師が手拍子を入れながら唱え、手をつないで一緒に跳び、声に合わせて3拍子のステップができるように続けた。次に教師が個々の児童に合った3拍子のテンポで2本の竹を開いて打ち、それを試みる児童の姿が現れ、全員がそれぞれに可能になった。次に、テンポを一定にして全員の児童が順番にステップを続けた。児童から学生のように竹を閉じたり開いたりして跳んでみたいとの希望が出た時点で、可能であろうと思われる児童の横に教師が寄り添い、児童が2本の竹を開・開・閉で打つ3拍子のリズムに合わせて他の児童が順番にステップを踏み姿が生まれ、学生と一緒にバンブーダンスが実現した。

3拍子のバンブーダンスにより、児童が拍感覚を共有しようとする様子、楽しんでいると思われる様子が観られるようになった。この時点で、教師は児童が好きな歌「イルカはザンブラコ」の音楽に合わせてバンブーダンスを提案した。児童は竹を跳ぶ全身運動と拍を打つ経験から、身体感覚として拍の感覚を納得できるようになっており、好きな歌に合わせて歌いながらバンブーダンスができることに一層積極的になった。友だちのバンブーダンスを見守る児童と教師も大きな声で歌いながら応援した事は、ステップする児童の気持ちと響きとを考えられるのではないだろうか。

次に、児童の足首へ鈴をつけてバンブーダンスをすることへ進めた。ステップに合わせて鈴が響き、児童に好評であった。

仲間と一緒に自分の感覚を合わそうとする意識が感じられるようになった。

2. 仲間と共に高まり、表現能力を引き出すために

児童一人ひとりに必要な支援は児童の数だけ多様であるが、「なかよし学級」が活動する重要な視点は、「全員参加で楽しめる活動」であり、活動によってコミュニケーションや音楽的な美的体験を重ねるねらいがある。「樽太鼓」と「段ボールの締太鼓」を使用した「ことば」のリズム打ち（口唱歌によるリズム奏）は、バンブーダンスの経験と平行して少しずつ拍が揃い、特に、始めの一打と終りの一打は一致するようになった。全身運動として獲得した拍感覚は、音楽で息を合わす体験であり、一打の音を仲間と共有できるようになった基盤と考えられる。中太鼓で音の響きを聞きながら言葉による分割リズムを楽しんだ。

児童がバンブーダンスと太鼓の音を出すことに夢中になった時には、顔の表情や身体の動きから、彼等が大きな音と大きな動きを全身で楽しんでいるようであった。このことは、全身で打ち鳴らそうとするかのような太鼓演奏と、全身で拍をステップするリズム感覚は児童には非日常的な経験であり、「なかよし学級」でリズム遊びをする事は彼らの気持ちを開放する楽しみになったと思われる。平成20年度は女子学生と男子学生の2名が参加したことで、「歳いくつ？お母さんよりチョット若い！」などの言葉がけを好むように、お姉さんとお兄さんへ甘える様子が見られた。学生と一緒に様々なプログラムを経験することは、児童から試みようとする気持ちを引き出しつつ、「なかよし学級」への参加意欲を高めることになったようである。このことは、担任のねらい通りでもあった。

児童はこのような経験を通して、新しい仲間（学生）と一緒に音を出す手応えを積み重ねていった。

リズムを打つ和太鼓が候補にあがった理由は、「児童は音程・歌詞を間違えると恥ずかしいので、歌声が小さくなりがちだ。しかし、打楽器の場合には不協和音の心配は無く、リズムのみの打楽器では音符の間違いに児童がこだわる（恥ずかしさも含めて）ことも少ないだろう。」との考えがあった。同時に日常的な身体の動きとは異なり、思いっきり打つ腕の動きは全身の動きでもあり、日常生活であまり必要としない大きな動作は、児童にストレスの発散になり得るだろう、との考えもあった。

教師は、バンブーダンスの経験によって児童が仲間と拍を共有する一体感は、打楽器では音が揃った瞬間を耳と身体の動きで実感できることであり、児童には「皆と一緒に」の感覚が「私と仲間」の意識を深めることへ効果的であることを納得した。児童にとってのリズム（口唱歌）に添って打楽器を打つリズム奏と全身の動きの関係は、目的の為の感覚レベルで自ら打つ行為である、といえるのではないだろうか。

1年目に、太鼓類の練習が円滑に進むにつれ、演奏をしながら仲間の音量の中の自分の音を聞くまでに至ったかどうかについては不明である。しかし、仲間の音に合わせて打とうとする様子は観察できた。特に、始めの一打と最後の掛け声とともに締めくくる一打「そ〜れ」の掛け声に続く「ドン」の打音は、児童の緊張感の最も高まる瞬間のようである仲間と合わそうと視線を動かしていた。楽譜は使用しないでリズムを口唱歌で覚え、口唱歌の言葉に合わせてパチで打つ児童は、意味・無意味のことばのリズムを基軸にパチを振り下ろし、太鼓の音を響かせた。どの子も太鼓の練習には喜

んで参加した。

2年目には、全員が同時に太鼓類で演奏できるように、キッズミニボンゴとドラムセット（3種類の小さな楽器のセット）を用意し、全員と一緒に楽器で演奏できるようになった。教師による太鼓の種類と組み合わせの工夫により、演奏にバリエーションが生まれ、気に入った太鼓に固守する児童もいたが、交代と順番を納得できるようになり、打楽器による合奏として一人ひとりの児童が自信を持ち始めた。

学校での音楽教育に過大な期待はかけるべきでない、と考えている我々は「一人ひとりの児童が少しの知識とそれに基づく是非と善悪を備えることで、打楽器合奏を楽しむことができる。」ということを学んだ。更に、今回見られた、児童が“自己主張”と“譲り合う”ことを理解した点は、学校で勉強することでは重要な指導であろうと考える。このような意味も含んで、児童の表現能力を引き出せるなら、今回の太鼓類による経験の教育効果は、意義のあることといえるのではないだろうか。

おわりに

「なかよし学級」の児童が“動き(身体)”を通して音を共有できることは、仲間と意志のやりとりの芽生えが生まれたと考えられよう。そして、教師や友だちと一緒に楽しさを感じているように観察できた。本稿の児童の活動紹介において、音楽は音を楽しむと理解すれば、なかよし学級の一人ひとりの力を引き出す絆が芽生えた音を楽しむ活動は、即ち、音楽活動といえよう。

2年間の経験を通して、児童は音の知覚、記憶、集中力、身体を動かすこと、そして、共同性によって生まれた音の世界を楽しむことが、常の事として受け入れられた様子であった。我々の目的は、彼らへ打楽器奏を教えることではなく、児童が遊びの活動的な感覚で、断片的なことばのリズムを音で楽しむ道具として太鼓類を用意した。「なかよし学級」の授業計画は、歌に“わらべうた”があるように、子どものために大人が創るのではなく、児童が児童なりに音の響きを楽しめる、自発的な創作リズムを引き出したい願いが基盤にあった。

今後の課題は、年度が変わり新たなメンバー構成で続ける打楽器奏において、一人ひとりの児童の個性をどのように引き出しながらグループ活動を展開するかの検討である。

なお、旧津市内小中学校の特別支援教育研究会の企画で例年開催される「卒業生を送る会」（2009年2月27日・会場：アスト津）において、足鈴を付けた「ケンケンパツのリズム」と「イルカはザンブラコ」（作曲者：若松正司、詩人：東 龍男）の音楽に合わせてバンブーダンスを披露した。